

自己愛傾向が行動的回避に及ぼす影響についての検討

前田 高幸*・岩永 誠**・生和 秀敏**

*: 広島大学生物圏科学研究科 ** : 広島大学総合科学部

Effect of narcissistic tendency on avoidant behaviors

Takayuki MAEDA*, Makoto IWANAGA**, Hidetoshi SEIWA**

*: *Graduate School of Biosphere Sciences Hiroshima University*

** : *Department of Behavioral Sciences, Faculty of Integrated Arts and Sciences,
Hiroshima University, Higashi-Hiroshima 739-8521, Japan*

Abstract: It has been noted that narcissists avoid the situations negatively evaluated. The present study aimed to examine the effect of Hypervigilant Narcissism (Gabbard, 1994) on avoidant behavior from perspectives of the relationship among personality traits, one's self-assessment, motivation, behavior strategies using the covariance structure analysis (path analysis). 293 Participants (Mean age = 20.5; $SD = 2.05$) completed questionnaires. Results suggest that Hypervigilant Narcissism had direct relations to personality traits, and strengthened the avoidant behavior indirectly ($R^2=.40$). Fear of negative evaluation, self-handicapping tendency, dependence desire, and lack of self-efficacy strengthened avoidant behavior directly.

Keyword: Hypervigilant Narcissism; avoidant behavior; path analysis

【序 論】

近年、わが国では若者層におけるフリーター人口の急増や高い離職率が問題とされている。フリーター人口は210万人を超え（労働経済白書，2004）、大学卒の労働者のうちの3割は、就職して3年以内に離職している（厚生労働白書，2004）。また、ニート（NEET: Not in Education, Employment, or Training）と呼ばれる、就職意欲がなく働かない、学生でもない無職の若者の急増も指摘されており、内閣府の調べでは2002年度にはニート人口は85万人を超えたとされる。フリーターを志向する高校生の多くは自由や気楽さを志向する一方で、社会的な責任性を回避する傾向を示す（小杉，2003）とされ、これらの現象は単純に社会構造上の問題では無く、現代の若者に特徴的な行動上の問題として懸念されている。

問題解決が必要な状況におかれながらも問題解決の努力を行わない、もしくは問題解決が必要な状況から回避・逃避を示すといった行動的特徴については、自己愛傾向の観点から検討されてきた。自己愛とは、Freudによって提唱された自己という統一的な身体表象に対する愛情を指し（小此木，

1985)、本来的には自分が自分を愛すること(小此木, 1981)を意味する。一般に自己愛傾向の強い者(以下、自己愛傾向者)は、高い自尊感情を示し(Emmons, 1984)、自己のパフォーマンスを他者からの評価以上に高く認知する(John & Robins, 1994; Robins & Beer, 2001)という特徴を示す。しかしその一方で、自己像は不安定であり、自尊感情は容易に傷つくため(小塩, 2001)、自尊感情を維持するための自己防衛を行いやすい(Asper, 1987 老松訳 2001)。わが国においては、青年期に見られる自己愛傾向の臨床報告において、他者と深く関わることで自らが傷つけられることを避けるため、表面的な対人関係を構築し、自己の誇大性を保持し続ける(町沢, 1998)という特徴が指摘されている。

本研究では、一般の若者における自己愛傾向の強さが、個人の示す回避・逃避的な行動傾向に与える影響を検討する。

自己愛傾向の定義

自己愛傾向の持つ概念的な意味合いは広範であり、研究者によって自己愛傾向の定義は異なっている。自己愛傾向は大別するとKernberg (1975)とKohut (1971)の論じる臨床像に分類される。Kernberg (1975)は、正常な自己愛と病理的な自己愛を質的に異なったものと捉え、病理的な自己愛の特徴として、他者に対する攻撃性や依存性、他者からの賞賛や注目を渴望するといった傾向を挙げている。一方Kohut (1971)は、自己愛を連続的なものとして捉え、自己愛傾向の高まりは自尊感情の傷つきやすさを意味するとしている。KernbergとKohutの相違と同様に、Broucek (1982)は自己愛傾向を「自己中心的」と「解離的」に、Rosenfeld (1987)は「厚皮」と「薄皮」に分類している。

Gabbard (1994)は、Kernbergの臨床像や、Broucek (1982)における「自己中心的」自己愛、Rosenfeld (1987)における「厚皮」の自己愛を近似した概念として捉え、誇大的・自己中心的であり、周囲を気にかけない「無関心型」の自己愛として分類している。同様に、Kohutの臨床像や、Broucek (1982)における「解離的」自己愛、Rosenfeld (1987)における「薄皮」の自己愛を近似した概念として捉え、抑制的で引きこもりがちであり、他者からの評価や反応に敏感な「過敏型」の自己愛として分類している。Table 1にGabbard (1994)の挙げる自己愛傾向の2分類の詳細な特徴を示す。「無関心型」の自己愛は他者からの反応を省みることがない点が特徴的であるが、一方で「過敏型」の自己愛は他者からの反応に対して過剰に反応する点が特徴的である。

Gabbard (1994)によれば、自己愛におけるこれらの類型は対人的な関わりにおける典型的なスタイルの2つの極に相当し、行動的な特徴や対処の仕方には相違があるが、いずれも自己評価を維持しようとする強い動機づけが根幹にあると主張している。「無関心型」の自己愛傾向者は、自分の業績などを他者に印象付けようとし、またその一方で他者からの反応は遮断し、自らが傷つけられることは避けようとする。それに対し、「過敏型」の自己愛傾向者は、自分自身に対する誇大性は自らの内面に留め、自らが傷つけられやすい状況を回避することで自己を防衛し、自己評価を維持しようとする。

また、こうした精神分析的な立場からの理論的・臨床的知見を基に、近年では調査研究を用い、2種類の自己愛傾向を直接的に測定しようとする試みもなされている。小塩 (2004)はGabbard (1994)の分類を元に、自己愛傾向の2成分モデル(Figure 1)を提唱している。このモデルは自己愛傾向の総合指標としての意味合いを持つ「自己愛総合」次元と、自己愛傾向の下位概念である「注目・賞賛欲求」が有意であるか、「自己主張性」が有意であるかを表す「注目-主張」次元の2軸から自己愛傾向を説明している。小塩 (2004)によれば、「自己愛総合」の次元において、自己愛総合高群は低群よりも、対人恐怖傾向が低く、攻撃的で個人志向的な特徴を持ち、全体として自己に対する誇

大感や他者に対する優越感を示す。また「注目－賞賛」次元において、「注目・賞賛欲求」が優位な者は「自己主張性」が優位な者よりも、自己主張的な行動が少なく、他者からの注目や賞賛を強く期待するなどの受身な態度を示し、対人恐怖的な行動を示す。これらの特徴から、「注目・賞賛欲求」が優位な自己愛傾向者および「自己主張性」が優位な自己愛傾向者は、それぞれGabbard (1994) の分類における「過敏型」、「無関心型」の自己愛傾向に相当するといえる。

こうした先行研究の知見より、町沢 (1998) が指摘する現代の若者において特徴的に見られる自己愛傾向とは、Gabbard (1994) の分類における「過敏型」の自己愛傾向と近似したものといえる。自己に対する誇大な感覚を有しながらも、自らが傷つけられる状況からは回避的な行動傾向を示す「過敏型」の自己愛傾向を検討することで、現代の若者において特徴的な回避・逃避的な行動が生じる原因を理解することができる。本研究ではGabbard (1994) の分類における「過敏型」の自己愛を検討の対象とし、分類の方法は小塩 (2004) の挙げる2成分モデルを参考にした。

Table 1 Gabbard (1994) による2種類の自己愛の特徴

無 関 心 型	過 敏 型
1 他の人々の反応に気づかない	1 他の人々の反応に過敏である
2 傲慢で攻撃的	2 抑制的で、内気で、あるいは自己消去的でさえある
3 自分に夢中である	3 自己よりも、他の人々に注意を向ける
4 注目的である必要がある	4 注目的になることを避ける
5 「送信者であるが、受信者ではない」	5 侮辱や批判の証拠が無いかどうか注意深く、他の人々に耳を傾ける
6 明らかに、他の人々によって傷つけられたと感じることに鈍感である	6 容易に傷つけられたという感情をもち羞恥や屈辱を感じやすい

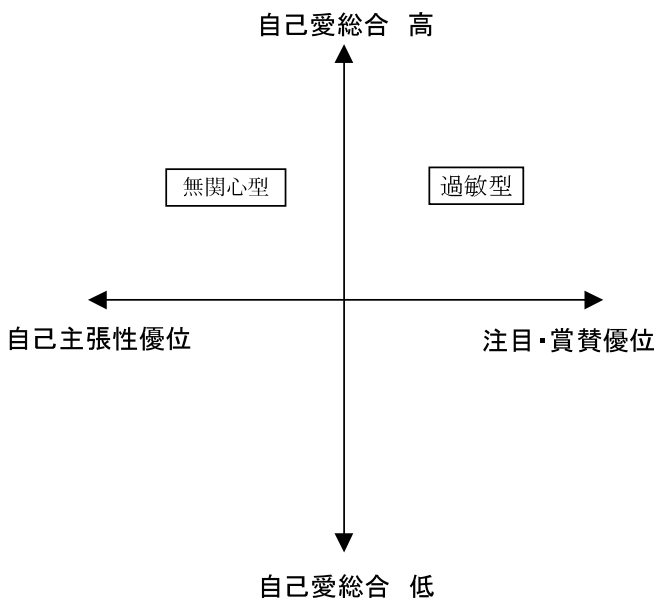


Figure 1 自己愛傾向の2成分モデル (小塩, 2004)

自己愛傾向者と個人内要因の関連

自己愛傾向と精神的健康との関連を検討した研究によれば、自己愛傾向は、下位側面のうち「注目・賞賛欲求」を除いて、自尊感情など心理的健康の指標と高い正の相関を示す (Emmons, 1984)。一方、「注目・賞賛欲求」は、高い自己価値に関連するものの、他者評価への過敏性と関連しており (小塩, 1998)、自己像の不安定性を媒介して自尊感情の低下・変動性に影響する (小塩, 2001)。また、一般的な日常場面における行動に影響する自己効力感は、不快な出来事の発生を制御することの可能性の認知に繋がる (Bandura, 1983) とされ、自己効力感の欠如は回避的行動に影響するといえる。以上のことから「過敏型」の自己愛傾向は認知レベルにおいて、低い自尊感情や自己効力感、高い評価懸念と関連すると考えられる。

また自己愛傾向者は、実際以上に自己を肯定的に示そうとする自己欺瞞的な高揚を示し (Paulhus, 1998)、他者からの客観的な評価以上に自己のパフォーマンスを高く評価する傾向や (John & Robins, 1994)、対人関係で自己中心的に他者を利用すること、その一方で他者に対しての共感は欠くといった特徴を持つ (American Psychiatric Association; APA, 1994)。このことから、「過敏型」の自己愛傾向は動機づけレベルにおいて、社会的・文化的に価値があるとされるものを達成したいという達成動機や、自己の評価を維持するために失敗することを避けようとする動機づけ、他者に対して依存しようとする欲求と関連すると考えられる。

課題や問題解決の遂行に失敗した結果、自己評価や社会的評価の低下が予想される場面において、自らがあえてその遂行を妨げるような行為をし、失敗した時には言い訳を表明し、能力評価の低下を抑えようとする方略として、セルフ・ハンディキャッピングが挙げられる (沼崎・小口, 1990)。この方略は、主として自己評価の防衛が目的とされることより、自己評価が傷つけられることを脅威とする「過敏型」の自己愛傾向との関連が強いと考えられる。

本研究における目的

自己愛傾向者が、自己評価が傷つけられるような状況からは回避的な行動を示しやすいという知見は先行研究で一致しており、自己愛の病理である自己愛性人格障害の診断基準 (DSM-IV; APA, 1994) において、自己愛傾向者における行動的特徴として示されている。しかし、こうした知見は臨床例からの報告によるものであるため、定性的評価が行われているのみであり、実際に定量的に検討されたものではない。そのため、自己愛傾向が直接回避的行動傾向を引き起こす要因となっているのか、もしくは自己愛傾向者の示す回避的行動が個人内の別の要因によるものなのかは明らかではない。

また、自己愛傾向と個人内要因の関連を検討した先行研究の多くは、自己愛傾向と各要因との関連を個別に検討したものである。そのため、自己愛傾向者における自己評価が動機づけに及ぼす影響や、動機づけや自己評価が行動傾向に及ぼす影響といった、個人内要因の相互関連による影響は十分に検討されていない。要因間の関連性を検討することで、自己愛傾向者における回避的な行動傾向に最も強く関連している要因は何であるのか、またその要因は直接的に影響しているのか、もしくは他の要因が仲介することで間接的に影響しているのかを明らかにすることが出来る。

本研究は、自己愛傾向が回避・逃避的な行動に与える影響について、自己愛と関連する個人内要因を仲介変数とした要因間の関連性を検討するものとした。とりわけ、本研究では、自己防衛の方略として回避的行動を採用しやすいとされる「過敏型」の自己愛に着目した検討を行う。

【方 法】

調査対象者

18歳から30歳までの男女318名を調査対象とした。回答に不備があった25名を分析対象から除外し、最終的な分析には男性138名、女性155名の計293名（平均年齢20.5歳、 $SD=2.05$ ）を用いた。

測定尺度

回答方法は6件法（1：全くあてはまらない～6：非常にあてはまる）を用いた。各尺度得点は、下位因子ごとに項目の得点を算術平均して求めた。

(1) 自己愛傾向

Gabbard (1994) および小塩 (2004) の指摘を参考に、自己愛傾向における「他者評価への過敏性」および「注目・賞賛欲求」を、「過敏型」の自己愛傾向の指標として用いた。具体的な項目としては、病的特徴に基づく自己愛に関する尺度（岡田, 1999）より「他者評価への過敏性」因子4項目、自己愛性人格目録短縮版（小塩, 1999）より「注目・賞賛欲求」因子5項目を用いた。特に、ここで用いた「他者評価への過敏性」因子は、「注目・賞賛欲求」因子と高い相関関係を示し、併存的な妥当性を持つことが確認されている（岡田, 1999）。

(2) 動 因

失敗回避動機を測定する指標として、「うまく出来ない、と初めから分かっていることはやりたくない」等からなる新規作成の8項目、達成動機を測定する指標として達成動機測定尺度（堀野, 1987）より10項目、依存欲求を測定する指標として依存欲求尺度（田中, 2003）より14項目を用いた。

(3) 自己評価

自尊感情を測定する指標として自尊感情尺度（山本・松井・山成, 1982）より10項目、自己効力感を測定する指標として特性的自己効力感尺度（成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995）より8項目を用いた。評価懸念を測定する指標としてFNE日本語版（石川・佐々木・福井, 1992）より6項目を用いた。

(4) 行動傾向

セルフ・ハンディキャッピングの採用傾向を測定する指標としてセルフハンディキャッピング尺度（沼崎・小口, 1990）より10項目を用いた。

また、日常において問題解決が必要な状況におかれた際の行動傾向として、日常場面において問題に直面した際に行う行動を想起させ、その場面において採用する対処方略の傾向を測定した。測度として、Ways of Coping checklist (WOC; Vitaliano, Russo, Carr, Maiuro, & Becker, 1985) より15項目、3次元コーピングスケール (TAC-24; 神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野, 1995) より5項目を用いた。

採用する対処方略を概念ごとに明確に区別するため、「問題焦点型対処」、「情動焦点型対処」、「対人依存型対処」、「回避型対処」の4因子構造を想定した。

問題焦点型対処とは、ストレスそのものを除去することを目的として行われる具体的な対処方法を考える方略であり、情動焦点型対処とは、ストレスによって生じる情動反応を和らげることを重視した対処である (Lazarus & Folkman, 1984)。情動焦点型対処には、認知的な枠組みを帰ることで対応する方法と情動の発散を試みる方法が含まれ、回避的行動も情動焦点型対処の一つとしてみなす場合があるが、本研究では回避的行動は情動焦点型対処と区別した。また、他人を頼ることでストレスに対処しようとする方略は、対人依存型対処として他の対処方略とは別個にとられるものと

した。本研究では、回避型対処を、ストレス状況に対する回避・逃避行動の指標とした。

手 続 き

「普段の行動や考え方についての調査」として質問紙の回答を求め、留め置き調査の形式をとった。

分析方法

測定した自己愛傾向、達成動機、失敗回避動機、自尊感情、自己効力感、セルフハンディキャッピング、採用する対処方略の尺度ごとに、因子分析（主因子法、Varimax回転）を行った。因子負荷量が.30以下の項目は削除し、再度因子分析を行った。スクリープロットによって各尺度の因子数を決定し、抽出された因子ごとにCronbachの信頼性係数を算出した。

自己愛傾向の程度による差異を検討するため、自己愛傾向の因子得点が上位・下位25%だった分析対象者を、それぞれ自己愛傾向高群・低群とし、各尺度の因子得点についてt検定を行った。

また、自己愛傾向とその他の各要因との関連性を検討するため、自己愛傾向とその他の各要因の因子得点について、相関分析を行った。更に、自己愛傾向が、動因・自己認知・行動傾向の各要因を仲介して、回避型対処に及ぼす影響を検討するため、自己愛傾向を説明変数、回避型対処の採用傾向を目的変数、その他の各要因を仲介変数とした共分散構造分析（パス解析）を行った。各仲介変数の関連性は探索的に検討するものとした。

モデル適合度の指標としては、 χ^2 値及び自由度、GFI値、AGFI値、CFI値、RMSEA値、AIC値を算出した。

【結 果】

(1) 尺度についての因子分析

自己愛傾向

想定した通りの2因子構造が確認された ($\alpha = .81$)。下位因子は、「他者評価への過敏性」因子 ($\alpha = .75$) 4項目、「注目・賞賛欲求」因子 ($\alpha = .82$) 5項目とした。

失敗回避動機

用いた8項目の信頼性は安定しており、1因子構造が確認された ($\alpha = .74$)。

達成動機

2因子構造が確認された ($\alpha = .75$)。下位因子は、既存の尺度に従い「競争的達成動機」因子 ($\alpha = .73$) 5項目、「自己充實的達成動機」因子 ($\alpha = .72$) 5項目とした。

依存欲求

因子負荷量の低い1項目を除外した。残り13項目より3因子構造が確認された ($\alpha = .84$)。下位因子は、既存の尺度に従い「精神的な支え」因子 ($\alpha = .78$) 4項目、「支援・アドバイス」因子 ($\alpha = .74$) 5項目、「相談・コミュニケーション」因子 ($\alpha = .69$) 4項目とした。

自尊感情

因子負荷量の低い1項目を除外した。残り9項目より1因子構造が確認された ($\alpha = .85$)。

自己効力感

因子負荷量の低い1項目を除外した。残り7項目より1因子構造が確認された ($\alpha = .80$)。

評価懸念

安定した1因子構造が確認された ($\alpha = .90$)。

セルフ・ハンディキャッピング

2因子構造が確認された ($\alpha = .53$)。 α 係数が低く内的一貫性が低かったが、原版の尺度でも同様

の傾向であり、再検査法の実施によって高い信頼性を確認されている（沼崎・小口，1990）ため、本研究ではこのまま用いるものとした。下位因子は、既存の尺度に従い「できない」因子（ $\alpha = .66$ ）6項目、「やろうとしない」因子（ $\alpha = .67$ ）4項目とした。

採用する対処方略

想定した通りの4因子構造が確認された（ $\alpha = .77$ ）。意味内容を吟味し、下位因子は「回避型対処」因子（ $\alpha = .79$ ）6項目、「対人依存型対処」因子（ $\alpha = .80$ ）5項目、「情動焦点型対処」因子（ $\alpha = .70$ ）4項目、「問題焦点型対処」因子（ $\alpha = .60$ ）5項目とした。

自己愛傾向の因子分析の結果をTable 2に示す。

Table2 自己愛傾向の因子分析の結果

	F 1	F 2
他者評価への過敏性（ $\alpha = .75$ ）		
大事な友だちから怒りを向けられると、自分自身がダメな人間のように感じる	0.821	0.149
他人から「あなたはこういう人だ」と言われると、すぐ自分でもそのように思えてくる	0.637	0.188
他人からの批判には、ぐさっとくる方だ	0.570	0.197
自分に関する噂を、すぐ本気にしてしまう	0.570	0.017
注目・賞賛欲求（ $\alpha = .82$ ）		
私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある	0.004	0.853
私は、みんなからほめられたいと思っている	0.139	0.818
私は、どちらかといえば注目される人間になりたい	0.332	0.655
私は、多くの人から尊敬される人間になりたい	0.377	0.581
私は、人々を従わせられるような偉い人間になりたい	0.080	0.480

(2) 自己愛傾向の差異についての検討

自己愛傾向高群・低群（ $n=73$ ）における各尺度の因子得点を比較したところ、失敗回避動機、達成動機、依存欲求、評価懸念、セルフハンディキャッピング、回避型対処、対人依存型対処、情動焦点型対処において、低群より高群の得点が有意に高かった（ $t_s(144) = 3.10 \sim 9.34$, $p_s < .01$ ）。自尊感情、自己効力感、問題焦点型対処においては得点に有意差は認められなかった（ $t_s(144) = 0.31 \sim 1.39$, n.s.）。

これにより、自己愛傾向が高いほど、失敗回避動機、達成動機、依存欲求、評価懸念が高く、回避型対処、対人依存型対処、情動焦点型対処の採用傾向が高いことが示された。

(3) 自己愛傾向と個人内要因の関連

自己愛傾向と測定した各尺度との相関を求めたところ、自尊感情・自己効力感・問題焦点型対処を除く各尺度と、比較的強い正の関連を示した。Table 3に自己愛傾向と各尺度の相関係数を示す。

また、回避型対処の採用についての影響過程を検討するため、自己愛傾向およびその他の個人内要因の変数間の関連を規定し、モデル適合度が最も高かったモデルを採択した。（Figure 2; $\chi^2(17) = 59.17$, $GFI = .954$, $AGFI = .879$, $CFI = .952$, $RMSEA = .092$ ）。回避型対処の採用傾向の重相関係数は（ $R^2 = .40$ ）であった。

Table 3 自己愛傾向と測定した各尺度との相関

	自己愛傾向
自尊感情	-0.03
自己効力感	-0.10
評価懸念	0.56***
失敗回避動機	0.24***
達成動機	0.42***
依存欲求	0.51***
セルフ・ハンディキャッピング	0.37***
問題焦点型対処	0.09
情動焦点型対処	0.47***
対人依存型対処	0.33***
回避型対処	0.35***

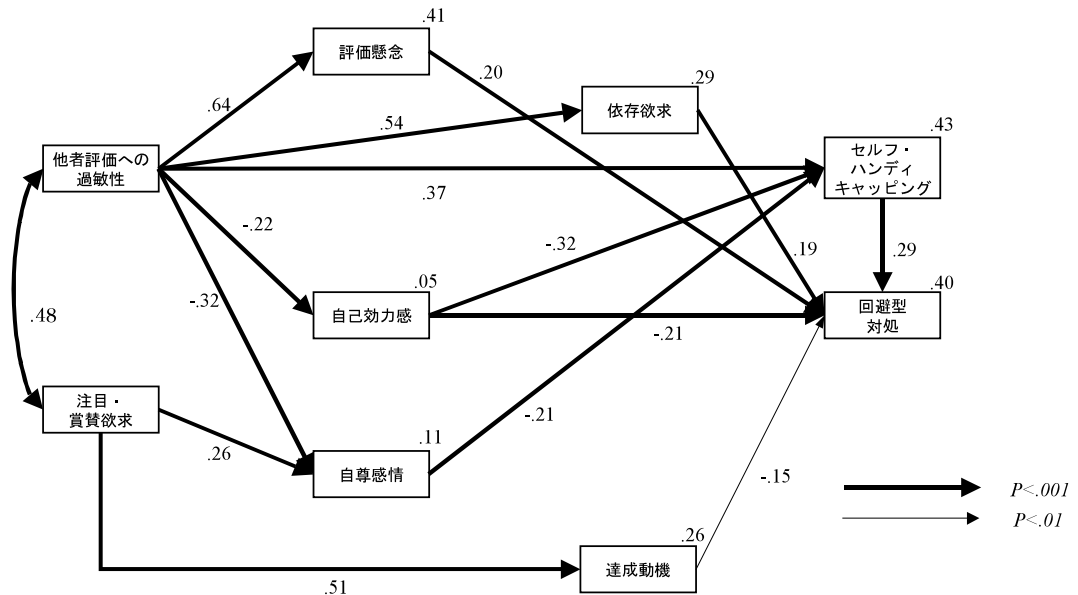


Figure 2 「過敏型」の自己愛傾向における共分散構造分析モデル
 $(\chi^2(17)=59.17, GFI=.954, AGFI=.879, CFI=.952, RMSEA=.092)$

このモデルにおいて、以下の関連が認められた。自己愛傾向における「他者評価への過敏性」は、評価懸念・依存欲求・セルフハンディキャッピング傾向の高さ、および自己効力感・自尊感情の低さに直接関連していた。また、評価懸念・依存欲求の高さ、および自己効力感・自尊感情の低さは、直接もしくはセルフハンディキャッピング傾向の高さを介し、回避型対処の採用傾向に正の関連を示した。また、自己愛傾向における「注目・賞賛欲求」は、自尊感情・達成動機の高さに直接関連していた。また、その自尊感情・達成動機は直接、もしくはセルフ・ハンディキャッピング傾向の低さを介し、回避型対処の採用傾向に負の関連を示した。なお、失敗回避動機は、モデルに対しての当てはまりが悪かったので分析対象からは除外した。

以上の点より、自己愛傾向が直接回避型の対処方略の採用傾向を規定するのではなく、個人内要因を仲介することで、回避型の対処方略の採用傾向を間接的に強める影響を持つことが示された。特

に、評価懸念・セルフハンディキャッピング傾向・依存欲求の高さ、および自己効力感の低さは回避型対処の採用傾向に対して、直接的に影響していることが示された。

【考 察】

本研究では、Gabbard (1994) の分類における「過敏型」の自己愛傾向が、回避・逃避的な行動に与える影響について、自己愛と関連する個人内要因を仲介変数とした要因間の関連性から検討した。その結果、自己愛傾向の強さは回避型の実処方略の採用傾向を間接的に強めることが示された。また、個人内要因のうち、自己効力感・依存欲求・評価懸念・セルフハンディキャッピング傾向は、回避型実処の採用傾向に対して直接的に影響していることが示された。

「過敏型」の自己愛傾向による影響

本研究において、「過敏型」の自己愛傾向が強いほど、失敗回避動機、達成動機、依存欲求、評価懸念、セルフハンディキャッピング傾向は強いことが示された。この結果はGabbard (1994) の指摘する「自分自身に対する誇大性は自らの内面に留め、自らが傷つけられやすい状況を回避することで自己評価を維持・防衛する」という特徴と合致するものであった。その一方で、「過敏型」の自己愛傾向の強さは、達成動機の高さとも関連しており、自分の評価を守ろうとするだけでなく、自らの評価を高めたいという動機づけも強いことが示された。

実処方略の採用傾向との関連においては、回避型実処や対人依存型実処、情動焦点型実処の採用傾向と正の関連が確認され、日常において自己防衛的な行動や他者依存的な行動を多く採用することが示された。特に、他者からの評価に過敏であり、否定的な評価を不安に感じつつも、他者からのサポートを強く望む点が「過敏型」の自己愛傾向においては特徴的であるといえる。

本研究で得られた結果において、「過敏型」の自己愛傾向における「注目・賞賛欲求」が自尊感情・達成動機の高さと関連する一方で、「他者評価への過敏性」は自己価値の低さや他者からの評価に対する不安の高さと関連していた。この結果は、「注目・賞賛欲求」は高い自己価値と関連している(小塩, 1998)が、自己愛傾向者の自己像は不安定である(小塩, 2001)とする先行研究の知見と一致したものと見える。すなわち「過敏型」の自己愛傾向者は、他者から認められたいという動機づけを保持し、自らに対する誇大な感覚を有してはいるものの、他者からの評価に対して過敏であるために自己評価は容易に低められ、安定しないと考えられる。

評価懸念とセルフハンディキャッピングの関連性より、他者からの否定的な評価に対する不安が強いため、結果としては自己防衛的な方略を採用しやすいことが考えられる。このため、自己に対して誇大な感覚を有し、人から認められたいという動機づけが強いにも関わらず、現実には自己防衛的になり回避・逃避的行動を示しやすくなると考えられる。

パス解析の結果において、回避型実処の採用傾向について「過敏型」の自己愛傾向は間接的な影響を示したものの、直接的影響を示さなかった。すなわち「過敏型」の自己愛傾向者の示す回避的な行動傾向は、自己愛の特性を保持していること自体が原因となつて生じるものではなく、他者からの評価に対して過敏であるがゆえに生じる自己評価の低下や他者から評価されることへの不安、他者に対する依存心の強さが主たる原因となっているといえる。このことより、「過敏型」の自己愛傾向における回避的な行動傾向を改善するためには、自己評価の向上や他者評価への不安の低減といった介入が必要であるといえる。

今後の課題

本研究においては過敏型の自己愛における一般的傾向を検討するものであったため、性差の検討は行わなかった。しかしながら、大石・福田・篠置（1987）は男女間で自己愛性人格による構造が異なる可能性を示唆しており、より詳細な形で自己愛の実態を捉えようとするならば、男女間の個人内要因の違いについても考慮する必要があるといえる。

また、本研究で得られた結果は横断的調査によるものであった。そのため本研究で得られた自己愛の影響過程はあくまで相関関係から推察されるものであり、厳密な意味での因果関係を説明するものとはいえない。本研究で得られた結果の因果関係を厳密に実証するためには、縦断的調査に基づく検討や実験計画法による検討を行う必要があるといえよう。

本研究の結果より、「過敏型」の自己愛傾向者において回避・逃避的行動が生起する直接的な原因となるのは、自己の能力評価の低さや他者に対する依存心の強さ、他者からの評価に対する不安であり、またそうした要因の影響を受けた自己防衛的な行動の生起しやすさが挙げられる。小塩（2004）の2成分モデルによれば、過敏型の自己愛傾向者も、自己に対する誇大感や他者に対する優越感を有する者である。すなわち「過敏型」の自己愛傾向者は、もともとの自己評価が低いのではなく、他者からの否定的評価に対して脆弱であると考えられる。自己愛傾向者において、行動上の不適応として生じる回避・逃避的行動を抑制するためには、他者からの否定的な評価による自己評価の低下や、他者から与えられる評価に対する不安感を抑制することが必要であるといえる。今後は、いかにして能力評価の低下を防ぐか、また他者評価に対する不安感を抑制する方略を検討していく必要があるといえる。

【引用文献】

- American Psychiatric Association (1994). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition; DSM-IV*
- Asper, Kathrin (1987). *Verlassenheit und Selbstentfremdung*, Walter Verlag AG, Olten.
(アスパー, K. 老松克博 (訳) (2001) 自己愛障害の臨床：見捨てられと自己疎外 創元社)
- Bandura, A. (1983). Self-efficacy determinants of anticipated fears and calamities, *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 464-469
- Broucek, F. (1982). Shame and its relationship to early narcissistic development, *International Journal of Psychoanalysis*, 63, 369-378.
- Emmons, R. (1984). Factor analysis and construct validity of the narcissistic personality inventory, *Journal of personality assessment*, 48, 291-300.
- Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV edition*. Washington American Psychiatric Press.
- 堀野緑 (1987). 達成動機の構成因子の因子分析－達成動機概念の再検討－教育心理学研究, 35, 148-154.
- 石川利江, 佐々木和義, 福井至 (1992). 社会的不安尺度FNE・SADSの日本語版標準化の試み, 行動療法研究, 18, 10-17.
- John, O. P., & Robins, R. W. (1994). Accuracy and bias in self perception, *Journal of personality and social psychology*, 66, (1), 209-219
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1995). 対処方略の三次元モデルの検討と

- 新しい尺度 (TAC-24) の作成, 教育相談研究, 33, 41-47.
- Kernberg, O. F. (1975). *Borderline conditions and pathological narcissism*, New York: Aronson.
- Kohut, H. (1971). *The Analysis of the Self*, New York: International Universities Press.
- 小杉礼子 (2003). フリーターという生き方 勁草書房
- 厚生労働省 (2004). 労働経済白書
- Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*, Newyork: Springer
- 町沢静夫 (1998). 現代人の心にひそむ「自己中心性」の病理 双葉社
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る 教育心理学研究, 43, 306-314.
- 沼崎誠・小口孝司 (1990). 大学生のセルフ・ハンディキャッピングの2次元 社会心理学研究, 5(1), 42-49
- 岡田努 (1999). 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究, 9, 21-31
- 小此木啓吾 (1981). 自己愛人間 朝日新聞社
- 小此木啓吾 (1985). 現代精神分析の基礎理論 弘文堂
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 (1987). ナルシシズム的人格の基礎的研究(1)—ナルシシズム的人格目録の信頼性と妥当性について—日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 534-535.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, 8, 1-11.
- 小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性、自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, 10, 35-44.
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- Paulhus, D. L., (1998). Interpersonal and Intrapyschic Adaptiveness of Trait Self-Enhancement: A Mixed Blessing?, *Journal of Personality and Social Psychology*, 74(5), 1197-1208
- Robins, R.W., & S. Beer J. (2001). Positive Illusions About Self: Short-Term Benefits and Long-Term Costs, *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 340-352
- Rosenfeld, H. (1987). *Impasse and interpretation: Therapeutic and anti-therapeutic factors in the psychoanalytic treatment of psychotic, borderline, and neurotic patients*, London: Tavistock Publications.
- 田中優 (2003). 依存欲求尺度の作成、および、信頼性と妥当性の検討 大妻女子大学人間関係学研究紀要, 4, 229-239.
- Vitaliano, P. P. Russo, J., Carr, J. E., Maiuro, R. D., & Becker, J. (1985). The Ways of Coping Checklist: Revision and Psychometric Properties, *Multivariate Behavioral Research* 20, 3-26
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.